種田山頭火の俳句におけるオノマトペ表現

藤　田　万喜子

Onomatopoeia in Haiku by Santouka Taneda

Makiko FUJITA

Abstract

Haiku are poems generally written with 17 syllables in a 5－7－5 pattern that usually include“Yukitekei”or a reference to the season. However, Santouka Taneda writes another type of haiku called“Jiyuritsu,”which does not follow these rules. In“Jiyuritsu haiku”there are no restrictions on how they are written or on the subject matter. Since there are no patterns to follow, the poet must choose his words very carefully, especially in regards to rhythm and sound. One of the characteristics of Santouka Zenkushu’s haiku is the use of onomatopoeic expressions. In this paper, haiku from“Santouka Zenkushu（The Complete Works of Santouka Taneda）”were selected to examine Santouka’s use of onomatopoeia as poetic expression.

Key words

Santouka Taneda, Haiku, Free-verse haiku, Onomatopoeia, Phonomime

Ⅰ　は　じ　め　に

山頭火が初めて句を発表したのは明治44年，この時の俳号は「田螺公」であった。「山頭火」の俳号を用いるのは大正２年３月からで，以後，没する昭和15年10月までこの俳号を用いた。

山頭火の生涯の作品を網羅した資料に『山頭火全句集』(1)がある。俳句は伝統文芸と言われ，有季定型（５・７・５の17音，季語を含む）が主流だが，山頭火が生涯をかけて作ったのは自由律俳句であった。自由律俳句は型に入れる手法ではないので自由に表現できるが，決まった型がないだけに言葉の持つリズムに重きを置くことになる。本稿では，『山頭火全句集』に収められた作品を研究対象とし，オノマトペ表現という視点で，それがどのように現れ，また，作品にどのような効果をもたらしているかなど，山頭火作品の特徴を考察したい。

Ⅱ　俳句表現に使用されたオノマトペ

山頭火がどのようなオノマトペを使用していたのかを調査するためにテキストとした『山頭火全句集』に収録された作品からオノマトペ表現を含む作品を抜き出し，その作品の数，作句年及びオノマトペ表現（擬音語・擬声語・擬態語・漢語由来の漢語オノマトペ）の区別を一覧表にした。その際に，作品数については同じ句形の場合は一句として数えた。また，オノマトペ表現の

区別（擬音語・擬声語・擬態語・漢語由来の漢語オノマトペ）については，『正しい意味と用法がすぐわかる擬音語・擬態語使い方辞典』(2)，『擬音語・擬態語辞典』(3)，『擬音語・擬態語4500日本語オノマトペ辞典』(4)，『短歌の技法　オノマトペ』(5)を利用した。

結果は，次の表１のようになった。

表１

番号	語　句	使用した句数	作句年（　）内は複数以上の句数を示す	辞書等における擬音語・擬態語の別	山頭火作品の擬音語・擬態語の別
1	うかと	1	大２	態	態
2	うつうつ	1	昭15	漢語オノマトペ	態
3	うっすりと	1	昭10	態	態
4	うっとりとして	1	昭８	態	態
5	うとうと	1	昭９	態	態
6	うねうね	1	昭８	態	態
7	うらうら	8	大４・昭11・昭12・昭13（２）・昭14（２）・昭15	態	態
8	うらら	1	大４	態	態
9	おっとりして	1	昭９	態	態
10	かあかあ	3	昭８・昭11・昭15	声	声
11	かあかあと	1	昭８	声	声
12	かあと	2	昭８・昭10	声	声
13	かさかさ	1	昭８	音・態	音
14	かさこそ	1	昭14	音・態	音
15	かさりこそり	1	昭８	音・態	音
16	かさりこそりと	2	昭８・昭11	音・態	音
17	がたがた	1	大４	音・態	音
18	がたびし	1	昭10	音・態	音
19	がつがつ	3	昭９（２）・昭11	態	態
20	かっちり	2	昭７（２）	態	態
21	がっちり	8	昭８（２）・昭10・昭11・昭12・昭13・昭14・昭15	態	態
22	がっちりと	1	昭９	態	態
23	がっちりとして	1	昭14	態	態
24	かっと	1	昭７	音・態	態
25	からから	6	昭７（２）・昭９（２）・昭11・昭15	声・音・態	音・態
26	がらがら	1	昭10	音・態	音
27	からころ	1	昭９	音	音
28	からころからころ	1	昭８	音	音

29	カラッと	1	明45	音・態	態
30	からりと	6	昭８・昭９（３）・昭10・昭11	音・態	態
31	からりとして	1	昭９	音・態	態
32	かろがろ	1	昭15	態	態
33	ぎっしり	1	昭７	態	態
34	ぎっしりと	1	昭７	態	態
35	きらきら	2	昭９・昭15	態	態
36	きらりと	1	昭８	態	態
37	ぐいぐい	2	昭５・昭15	音・態	態
38	ぐいと	1	昭15	態	態
39	くっきりと	1	昭８	態	態
40	ぐっすり	1	昭８	態	態
41	ぐっすりと	2	昭８（２）	態	態
42	ぐったり	2	昭７・昭10	態	態
43	ぐるりと	3	昭５・昭７・昭11	態	態
44	くわうくわう	1	昭14	音	声
45	げそりと	2	昭９（２）	態	態
46	げっそりと	1	昭９	態	態
47	げろげろ	3	昭10・昭11・昭15	声・音・態	声
48	ごうごう	1	大７	音	音
49	ごうごうの	1	大５	音	音
50	ごくごく	2	昭15（２）	音・態	音・態
51	ごしごし	1	昭８	音・態	態
52	ごたごた	1	昭８	態	態
53	こりこり	1	昭７	音・態	音
54	ころころ	5	昭８（２）・昭９（２）・昭14	態	態
55	ごろごろ	7	昭７・昭９・昭10・昭14（４）	音・態	態
56	ころり	2	昭10（２）	音・態	態
57	ころりと	4	昭５・昭９・昭10・昭13	音・態	態
58	ごろりと	7	昭７・昭８（３）・昭９・昭11・昭13	音・態	態
59	こんがり	1	昭９	態	態
60	こんこん	2	昭14・昭15	音・態	音・態
61	さうろうとして	1	昭10	漢語オノマトペ	態
62	さくさく	2	昭８・昭９	音・態	音

63	さくさくと	2	大４（２）	音・態	音
64	ざくりざくり	1	昭５	音・態	音・態
65	さっと	1	昭８	音・態	音・態
66	さめざめ	1	昭14	態	態
67	さめざめと	1	昭９	態	態
68	さらさら	8	昭６・昭７・昭８(4)・昭９・昭15	音・態	音・態
69	さらりと	1	昭９	音・態	態
70	しくしく	5	昭５・昭７・昭11・昭14・昭15	声・態	音・態
71	しくしくと	2	大４・大６	声・態	音・態
72	しっかと	2	昭９・昭14	態	態
73	しっかり	1	昭８	態	態
74	しっかりと	1	昭８	態	態
75	しづしづ	1	大５	態	態
76	じっと	2	大４・昭14	音・態	態
77	しっとり	10	昭５・昭８(2)・昭10・昭11・昭13・昭14(2)・昭15(2)	態	態
78	しっとりと	6	昭５・昭８(4)・昭９	態	態
79	しとしと	1	昭15	態	音・態
80	シャンシャン	1	昭10	音・態	音
81	しょうしょうと	1	昭８	漢語オノマトペ	態
82	しょんぼり	2	昭９・昭11	態	態
83	しんかんと	1	昭８	漢語オノマトペ	態
84	しんかんとして	3	昭９(3)	漢語オノマトペ	態
85	しんしん	7	大６・昭８・昭14(5)	漢語オノマトペ	態
86	しんしんと	2	大５(2)	漢語オノマトペ	態
87	しんしんとして	2	大４・大７	漢語オノマトペ	態
88	しんとして	1	大７	態	態
89	しんみり	4	昭９(2)・昭10・昭15	態	態
90	しんみりする	2	昭９・昭10	態	態
91	すいすい	1	昭７	態	態
92	すうっと	1	昭11	音・態	態
93	ずうっと	2	昭８・昭10	態	態
94	すくすく	2	昭13・昭14	態	態
95	すくすくと	2	大４・昭９	態	態
96	スクと	1	大３	態	態

97	すっかり	28	昭４・昭５・昭７(2)・昭８(6)・昭９(5)・昭10(3)・昭13・昭14(6)・昭15(3)	態	態
98	ずっしり	1	昭11	態	態
99	ずっと	1	昭10	態	態
100	すやすや	1	昭９	態	態
101	ずんぶり	10	昭５(2)・昭６・昭７・昭８・昭10・昭11・昭13・昭14・昭15	態	態
102	ずんぶりと	2	昭９(2)	態	態
103	せかせか	1	昭10	態	態
104	せっせと	2	昭８・昭９	態	態
105	そそくさ	1	昭７	態	態
106	そよそよ	1	昭８	態	態
107	ぢいと	1	昭８	声・音・態	声
108	ちかちか	2	昭10・昭13	態	態
109	ちくたく	1	昭９	音	音
110	ぢっと	3	昭８・昭10・昭13	音・態	態
111	ぢっとして	3	昭８・昭９・昭10	音・態	態
112	ぢっとしてゐる	5	昭８(2)・昭９・昭10・昭15	音・態	態
113	ぢゅくぢゅく	1	昭８	態	態
114	ちょいちょい	1	昭11	態	態
115	ちょいと	6	昭９(2)・昭10・昭13・昭14・昭15	態	態
116	ちょっと	1	昭10	態	態
117	ちょっぴり	5	昭５・昭14(2)・昭15(2)	態	態
118	ちょろちょろ	2	昭10(2)	音・態	態
119	ちょろちょろする	1	昭８	音・態	態
120	ちらちら	3	大５(2)・昭15	態	態
121	ちらちらして	1	昭５	態	態
122	ちらちらする	1	昭９	態	態
123	ちらほら	9	昭５・昭８・昭９(2)・昭10・昭14(2)・昭15(2)	態	態
124	ちらほらと	3	大２・昭９・昭10	態	態
125	ちろちろ	5	大４・昭７(2)・昭14(2)	声・音・態	態
126	ちろちろと	1	昭９	声・音・態	態
127	つやつや	1	昭11	態	態

128	つるりと	2	昭９・昭13	音・態	態
129	でこぼこ	1	昭15	態	態
130	どかりと	1	昭７	態	態
131	どさと	1	大６	音・態	態
132	どさりと	1	昭８	音・態	態
133	どしどし	1	昭14	音・態	態
134	どっかりと	1	昭５	態	態
135	どっさり	7	昭７・昭８(2)・昭14・昭15(3)	音・態	音・態
136	どっしり	4	昭13・昭14(2)・昭15	音・態	態
137	どっしりと	2	昭５・昭９	音・態	態
138	どっと	1	昭15	声・音・態	態
139	とっぷり	4	昭８・昭９(2)・昭11	態	態
140	とっぷりと	1	昭10	態	態
141	とどろ	1	昭15	音・態	音
142	とぼとぼ	1	昭10	態	態
143	とろとろ	5	昭８・昭９・昭10・昭15(2)	声・音・態	態
144	どろどろ（の）	3	昭８(3)	音・態	態
145	とんからとんから	1	昭12	音	音
146	とんかん	1	昭７	音	音
147	とんとん	2	昭９・昭10	音・態	音
148	どんどん	1	昭９	音・態	音
149	どんぶりと	1	昭８	音・態	音
150	にこにこ	2	昭８・昭15	態	態
151	にょきと	1	昭８	態	態
152	にょきにょき	5	昭８(4)・昭９	態	態
153	にょこりと	2	昭８・昭９	態	態
154	にょっこり	1	昭９	態	態
155	ぬくぬくと	1	昭10	態	態
156	ぬくぬくとして	1	昭８	態	態
157	のそのそ	1	昭８	態	態
158	のそりと	3	昭９・昭10(2)	態	態
159	のっそり	1	大４	態	態
160	のっそりと	1	昭８	態	態
161	のびのびと	1	昭６	態	態
162	のんびり	1	昭11	態	態
163	のんびりと	2	昭６・昭８	態	態

164	ばさりと	2	昭10・昭11	音・態	音
165	ハタと	1	大５	音・態	態
166	はたはた	3	大４・昭７・昭11	音・態	音・態
167	ばたり	1	昭７	音・態	音
168	ぱちぱち	2	昭８・昭９	音・態	音
169	ぱちりぱちり	1	昭15	音・態	音
170	はっきり	9	昭８(4)・昭10・昭11・昭14・昭15(2)	態	態
171	はっきりと	4	昭９(3)・昭11	態	態
172	ばったり	1	昭８	態	態
173	ばっちり	1	昭８	態	態
174	ぱっちり	1	昭８	音・態	態
175	ぱっと	3	昭７・昭８・昭９	態	態
176	パッと	1	昭５	態	態
177	ばらばら	1	昭７	音・態	音
178	はればれ	1	昭９	態	態
179	はればれとして	1	昭10	態	態
180	ぴかぴか	1	昭10	態	態
181	ひしと	1	昭８	音・態	態
182	ひしひしと	1	昭14	音・態	態
183	ヒソと	1	大２	態	態
184	ひそひそ	1	昭15	音・態	態
185	ひたひた	1	大４	音・態	態
186	ひたひたと	2	大３・大４	音・態	態
187	びっしょり	6	昭５・昭７(3)・昭８(2)	態	態
188	びっしり	2	昭８・昭14	態	態
189	びっしりと	1	昭８	態	態
190	ひっそり	14	昭４・昭８(4)・昭９(3)・昭10(4)・昭13・昭14	態	態
191	ひっそりかんとして	1	昭８	態	態
192	ひっそりして	1	昭９	態	態
193	ひっそりと	6	昭７・昭８・昭９(2)・昭11(2)	態	態
194	ひっそりとして	4	昭８・昭９・昭12・昭14	態	態
195	ぴったり	5	昭７・昭８・昭10(2)・昭14	態	態
196	ぴったりと	2	昭８・昭９	態	態

197	ひょいと	15	昭９(3)・昭10(3)・昭11(2)・昭12(2)・昭14(2)・昭15(3)	態	態
198	ひょいひょい	1	昭15	態	態
199	ひょうひょうとして	1	大10	漢語オノマトペ	態
200	ひょっこり	3	昭５・昭８・昭10	態	態
201	ひょろひょろ	4	昭８(3)・昭11	態	態
202	ぴょんと	1	昭７	態	態
203	ぴょんぴょん	3	昭７・昭８（２）	態	態
204	ひらひら	12	昭８(3)・昭10(3)・昭11(2)・昭12(2)・昭15(2)	態	態
205	ひらひらする	1	昭９	態	態
206	ひらり	2	昭８・昭11	態	態
207	ひらりと	3	昭７・昭８・昭９	態	態
208	ぴんぴん	1	昭14	音・態	態
209	ふうふ	1	昭10	声・音・態	声
210	ふうわり	1	昭５	態	態
211	ぶすりと	1	昭15	音・態	音
212	ふっくら	2	昭15(2)	態	態
213	ふっと	8	昭９(2)・昭10・昭11(2)・昭12・昭13(2)	声・音・態	態
214	ぶらぶら	9	昭７・昭８・昭９(2)・昭11(2)・昭14(2)・昭15	態	態
215	ぶらぶらと	1	昭９	態	態
216	ぶらり	2	昭７・昭10	態	態
217	ふらりと	8	昭８・昭９(2)・昭10・昭11・昭13(2)・昭15	態	態
218	へうへうとして	3	昭２，３年・昭11(2)	漢語オノマトペ	態
219	べったり	3	昭７・昭８・昭15	態	態
220	べったりと	1	昭７	態	態
221	べっとりと	1	昭８	態	態
222	へんぽん	4	昭７・昭９・昭12・昭15	漢語オノマトペ	態
223	へんぽんと	1	昭10	漢語オノマトペ	態
224	へんぽんとして	4	昭７・昭10(2)・昭12	漢語オノマトペ	態
225	ぼうぼう	1	昭14	音・態	音
226	ぼうぼうと	2	大９・昭15	音・態	態
227	ぼうぼうとして	5	昭５・昭11(2)・昭14(2)	音・態	態

228	ほうほけきょ	1	昭９	声	声
229	ぽかぽか	5	昭８(2)・昭10・昭13・昭14	音・態	態
230	ぽかんと	1	昭９	音・態	態
231	ぽきぽき	2	昭８・昭13	音・態	音
232	ほきりと	1	昭８	音・態	音・態
233	ぽきりと	1	昭８	音・態	音・態
234	ぽこぽこ	3	昭５・昭８・昭13	音・態	態
235	ぽそぽそ	3	昭８・昭11・昭12	声・音・態	音・態
236	ぽたぽた	1	昭10	音・態	音・態
237	ぽちり	1	昭９	態	態
238	ほっかり	8	昭７(3)・昭８(2)・昭９(2)・昭15	態	態
239	ほっかりと	6	昭７・昭８(2)・昭９(2)・昭10	態	態
240	ほっかりとした	1	大９	態	態
241	ぽっかり	3	昭８・昭９・昭10	態	態
242	ぽっかりと	2	昭８・昭14	態	態
243	ぽっきり	2	昭８・昭15	音・態	態
244	ほっくり	2	昭７（２）	態	態
245	ぽっそり	1	大７	態	音
246	ぽったり	1	昭15	音・態	音
247	ぽっちり	2	昭８・昭９	態	態
248	ぽっちりと	1	昭９	態	態
249	ほっと	13	昭８(2)・昭９(3)・昭10(2)・昭11・昭13・昭14(2)・昭15(2)	音・態	態
250	ぽっと	1	昭11	態	態
251	ぽっとり	4	昭７・昭８・昭９・昭15	音・態	音
252	ほつほつ	4	昭７(2)・昭８・昭15	態	態
253	ぽつぽつ	1	昭14	態	態
254	ぽとぽと	1	昭14	音・態	音・態
255	ほとり	1	昭８	音・態	態
256	ぽとり	4	昭10・昭15(3)	音・態	音
257	ぽとりと	8	昭８(4)・昭９(3)・昭15	音・態	音・態
258	ぽとりぽとり	4	昭８・昭９・昭10・昭13	音・態	音
259	ほのぼの	4	昭15(4)	態	態

260	ぽりぽり	6	昭５・昭８・昭14(2)・昭15(2)	音・態	音・態
261	ぽりぽりと	1	昭８	音・態	音・態
262	ほろ	1	昭８	態	態
263	ほろっと	1	昭10	音・態	態
264	ほろと	1	大３	態	態
265	ほろほろ	11	大４・大５・昭２・３年・昭５・昭９(2)・昭11・昭14(2)・昭15(2)	声・音・態	音・態
266	ぼろぼろ	1	昭14	態	態
267	ぽろぽろ	6	昭８・昭13(2)・昭15(3)	態	態
268	ほろほろの	1	大５	態	態
269	ぽろり	1	昭14	態	態
270	ほろりと	5	昭７・昭８(2)・昭９・昭14	態	態
271	ほろろ	2	大３・大５	声・態	態
272	ほんのり	1	昭11	態	態
273	ぽんぽん	1	昭９	音・態	音
274	ぼんやり	3	昭９（２）・昭10	態	態
275	ぼんやりして	1	昭10	態	態
276	むくむく	2	昭14・昭15	態	態
277	むくむくと	2	大４・昭10	態	態
278	むっちり	2	昭13・昭15	態	態
279	めっきり	10	昭５・昭８(3)・昭９(3)・昭10・昭15(2)	音・態	態
280	もうもうと	1	昭11	声・態	態
281	もくもく	3	昭14・昭15(2)	態	態
282	もくもくとして	2	昭12・昭15	態	態
283	もぞもぞ	1	昭13	態	態
284	もりもり	1	昭15	態	態
285	ゆうゆうと	1	昭８	漢語オノマトペ	態
286	ゆうゆうとして	2	昭５・昭11	漢語オノマトペ	態
287	ゆっくり	12	昭５(2)・昭７(3)・昭８・昭９・昭11(2)・昭14(2)・昭15	態	態
288	ゆったりと	3	大９・昭９(2)	態	態
289	ゆらゆら	1	昭15	態	態
290	ゆらら	2	大４(2)	音・態	態
291	ヨタヨタヨタ	1	昭７	態	態

292	よちよち	1	昭８	態	態
293	よぼよぼ	1	昭15	態	態
294	よぼよぼの	1	昭９	態	態
295	よろよろ	3	昭５・昭14(2)	態	態
296	らんらんとして	1	昭８	漢語オノマトペ	態
297	りんりん	1	昭７	漢語オノマトペ	音
298	からり・しっくり	1	昭５	からり：音・態 しっくり：音・態	からり：態 しっくり：態
299	ぎゃあと・ほうと	1	昭８	ぎゃあと：音 ほうと：音・態	ぎゃあと：音 ほうと：音
300	しとしと・さらさら	1	昭９	しとしと：態 さらさら：音・態	しとしと：態 さらさら：態
301	ばたり・ぽとり	1	昭９	ばたり：音・態 ぽとり：音・態	ばたり：音 ぽとり：音
302	ほっと・ひょろひょろ	1	昭７	ほっと：音・態 ひょろひょろ：態	ほっと：態 ひょろひょろ：態
303	ゆらゆら・ひらひら	1	昭９	ゆらゆら：態 ひらひら：態	ゆらゆら：態 ひらひら：態
304	よぼよぼの・ぢっと	1	昭８	よぼよぼの：態 ぢっと：態	よぼよぼの：態 ぢっと：態

一句の中に一語のオノマトペを使用している句は279句（同一語句でもパターンが異なった場合は一句と数えた。例えば，「がっちり」の場合，「がっちり」，「がっちりと」，「がっちりとして」をそれぞれ一句扱いとした）であった。一句の中に複数のオノマトペを使用している句はそれぞれ別扱いとして数え，７句あった。

最も多く使用していた語句は「すっかり」で，28句。以下10句以上に使用されていた語句を順に示すと，ひょいと（15），ひっそり（14），ほっと（13），ゆっくり（12），ひらひら（12），ほろほろ（11），めっきり（10），ずんぶり（10），しっとり（10）であった[6]。

物象の客観的な擬態語は少なく，心持ちや感情に関わりのある擬態語を多く使用している点を特徴として挙げられる。

Ⅲ　結果と考察

表１をもとに以下のような調査結果を得た。

１．年度別オノマトペ語句数

オノマトペ語句数を年度別に表すと，

表２

年	明45	大２	大３	大４	大５	大６	大７	大９	大10	昭２・３
語句数	1	3	4	16	8	3	4	3	1	2
比率％	0.18	0.53	0.70	2.80	1.40	0.53	0.70	0.53	0.18	0.27

昭4	昭5	昭6	昭7	昭8	昭9	昭10	昭11	昭12	昭13	昭14	昭15	総数
2	26	4	45	109	86	63	42	11	24	49	65	571
0.35	4.55	0.70	7.88	19.09	15.06	11.03	7.36	1.93	4.20	8.58	11.38	

となる。昭和５年以後にオノマトペ語数が増えていることが注目される。山頭火の生活を見ると，昭和５年９月初旬に山頭火はそれまでに書いた「行乞記」などを焼き捨てて自殺を試みたが，未遂に終って命をとりとめている。その後，僧形で行乞を始め，放浪流転の生活の中で再び日記「行乞記」を書き始める。オノマトペ語数の多い昭和８年は，放浪流転の生活に区切りをつけて結んだ其中庵で，句集を編んだり，俳人と交流したり，活発な俳句活動を展開している。このような生活の変化が句数につながったとも考えられる。しかし，なぜオノマトペの作品が多いのであろうか。句数の多さは改作・推敲の繰り返しが多いことが要因と思われる。

例えば，山頭火のオノマトペを含んだ作品の作り方を見ると，

ひっそりとしてぺんぺん草の花ざかり　昭８
ひっそりかんとしてぺんぺん草の花ざかり　昭８

のように，同一内容をオノマトペをかえたのみの改作やオノマトペは同じで，

ひっそりとして八ツ手花咲く　昭12
八ツ手若葉のひっそりとして　昭14

のように，その位置をかえて作り直しているものが多い。また，次の

落葉ふかく藪柑子ぽつちり　昭８
藪柑子もさびしがりやの実がぽちり　昭９
藪柑子もさびしがりやの実がぽつちりと　昭９

旅のからだでぽりぽり掻く　昭５
旅のからだをぽりぽり掻いて音がある　昭８
からだぽりぽり掻いて旅人　昭14
旅のからだをぽりぽり掻いてゐる　昭14
ぽりぽりさみしいからだを掻く　昭15
寝覚ぽりぽりからだを掻く　昭15

のように，オノマトペをかえ，位置も変えるというという場合もある。

数の点からいえば，このように改作・推敲を繰り返す傾向が多いことが自ずと句数の多さにつながっている。よりふさわしいオノマトペを探ることは，より効果的なオノマトペの使い方を探ることでもあり，ここから山頭火のオノマトペへの関心の高さを指摘することができる。

２．オノマトペとは

ここで，オノマトペとはどのような言葉を指すのかについて，「オノマトペのたのしみ」（小野正広）[7]をもとに触れておきたい。

オノマトペは「擬音語（または擬声語）・擬態語などとも呼ばれてきた言葉の総称」，「擬音語・擬態語をまとめた言葉」と定義される。例えば「濁流がごうごうと流れている」という場合の「ごうごう」のように擬音語か擬態語かのどちらか一つに分類することが出来ない場合の，両者をまとめた便利な言葉だとしている。擬音語・擬態語の定義については，「ものの音・声などを表し

た語，音のない仕草や動作を音に表した語」「何かの音声や何かの様子を表すもの」としている。擬態語には下位区分として，外面的なありさまを表す「擬容語」，内面的な感情を表す「擬情語」に分類されることもあるという。

形態でオノマトペを見ると，オノマトペの要素（オノマトペのもと，語根）の畳語（反復）形，この他に，「り」「っ」「ん」「ー」（引く音，長音）「ら」という要素がオノマトペの要素の最後に或は途中に現れた形，オノマトペのもとの初めの音が半濁音・濁音になる形があるという。

つまり，オノマトペは，何かの音や何かの様子を表す言葉で，いろいろな区分があるが，音の持つイメージを利用してその場の雰囲気を表す言葉であり，さまざまな形となって表現を豊かにしてくれる言葉なのである。

3．擬音語・擬声語・擬態語別の割合

山頭火が使用したオノマトペを擬音語・擬声語・擬態語で類別すると，次のようになる。

表3

山頭火作品のオノマトペ分類	擬音語	擬音語・擬態語の両方	擬声語	擬態語	総　数
語句数	37	20	8	232	297
比率　　%	12.46	6.73	2.69	78.11	

この表から，山頭火には擬態語使用が約78％あって，圧倒的に多いことが分かる。擬音語・擬態語の両方使用を合わせれば85％に近い。これに対し，擬声語は８語と少ない。山頭火が作品に詠んだ擬声語とその声の主体を見ると，かあかあ・かあかあと・かあと（鴉），くわうくわう（鶴），げろげろ（蛙），ぢいと（蝉），ふうふ（ふるつく＝梟のこと），ほうほけきょ（鶯笛）となっている。

一句の中に二語用いているものがあり，擬声語は，「ぎゃあ」と「ほう」である。その句は

　ぎやあとなけばほうとなくふくろうの夜で　昭８年

である。「ほう」の声の主は梟と分かるが「ぎゃあ」の方は明らかでない。梟のようでもあるが，夜に鋭く鳴く鳥のようでもある。

放浪して歩いていた山頭火であるから，自然と触れることが多かったはずであるのにこのように少ないことを考えると擬声語にはあまり関心を示さなかったと言えるだろう。

次に，擬音語・擬態語の形態における割合を『擬音語・擬態語辞典』（角川書店　昭60年４月刊）の「五　擬音語・擬態語の形態」の分類をもとに調査した。

表4

番号	項　　目	句数	比率％
①	一拍の語根＋「い」「ん」「っ」引く音のもの。かっ（と）など	18	7.44
②	二拍の語根のもの。どさ（と）など	10	4.13
③	二拍の語根＋「っ」の形のもの。ほろっ（と）など	2	0.83
④	二拍の語根＋「ん」のもの。ぽかん（と）など	1	0.41
⑤	二拍の語根＋「り」の形のもの。ぐるり（と）など	26	10.74
⑥	⑤の一種「り」でないもの。古風な語。うららなど	8	3.31

⑦	二拍の語根の中間に、つめ、はねの入ったもの。せっせ（と）など	2	0.83
⑧	⑤の形の第一拍と第二拍の間に、はねる音、つめる音の入ったもの。おっとりなど	57	23.55
⑨	二拍の語根の繰り返しのもの。きらきらなど	98	40.50
⑩	⑨に似て類音のものを重ねるもの。かさこそなど	11	4.55
⑪	全く似ていない二拍を重ねたもの。がたびしなど	3	1.24
⑫	⑤⑥⑦の繰り返し。ざくりざくりなど	3	1.24
⑬	⑫に似てあとのものは、多少形の違うもの。かさりこそりなど	1	0.41
⑭	その他のもの。ほうほけきょなど	2	0.83
	合　計	242	

オノマトペの形態は，畳語（反復）形の他に，「り」「っ」「ん」「ー」（引く音）「ら」のような要素がオノマトペの要素（オノマトペのもと，語根）の最後に，或は途中に現れた形に分けられ，形の上でも特徴を持っていた。

この表を見ると，⑨の二拍の語根の繰り返しの型が最も多く，98語で４割を占めている。使用度の多い語句は，「ひらひら」「ほろほろ」「ぶらぶら」「うらうら」「さらさら」「ごろごろ」「しんしん」「からから」「ぽりぽり」「ぽろぽろ」などである。この型は畳語（反復）の形で，３語ある⑫も同様の型である。合わせれば100語を越える。この型は，音や動作・状況が継続していることを表現するもので，意識の対象になっている時間が長めであるという特徴があり，そのために余韻も生まれるという型である。

次に多いのは，⑧の語末に「り」があり，その語の中間に「っ」が加わったものである。これは，語中の「っ」によってその状態の確認や強調がなされ，語末の「り」によって音や動作・状況などをひとまとまりのものとして表現するものである。この型で使用度の多い語句をあげると，「すっかり」，「ひっそり」，「ゆっくり」，「しっとり」，「ずんぶり」，「めっきり」などがある。

以上の⑧と⑨を合わせれば６割を越える。

これらを創作者の側から言い換えれば，対象ををひとまとまりに捉えたり，時間で捉えたりして，そこから生まれた感覚をオノマトペという形で一句に表出した手法と言えよう。また，反復はリズムを生み，強調にもつながる手法でもある。

この型を山頭火は好み，或は得意としたのである。

Ⅳ　作品におけるオノマトペの使われ方及びその効果

Ⅲまでは，数量を中心にオノマトペの現れ方を考察してきた。ここでは視点を変えて山頭火のオノマトペの使い方を作品から考察してゆきたい。

そのために先ず，写生の方法を提唱した正岡子規のオノマトペの使い方と比較してみたい。

山頭火の作品の中でオノマトペを配して蝶を詠んだ句が11句ある。その中で，後世に残したい句として一代句集『草木塔』に収録された句は次の３句である。

てふてふうらからおもてへひらひら　　昭８
ひらひら蝶はうたへない　　昭11
てふてふひらひらいらかをこえた　　昭11

これらに対し，正岡子規の句からは，蝶を素材として，オノマトペ「ひらひら」を使用した

　　ひらひらと蝶々黄なり水の上　　明28

を取り上げる。

「ひらひら」は薄く軽い物が空中にひるがえるさま，こきざみに揺れ動くさまを表す擬態語である。子規の句は，春になって水も温みあふれている，その水の上を黄色の蝶が軽やかに飛んでいるという句。蝶の飛び方を「ひらひら」と形容しているものの，焦点は「黄なり」と色に絞られており，「ひらひら」のオノマトペは中心になっていない。これに対して，山頭火の場合は，「うらからおもてへひらひら」「ひらひらうたへない」「ひらひらいらかをこえた」とあり，蝶の飛び方の形容が句の中心になっている。飛んでいく蝶の動きが残像として残り，オノマトペの働きを活かした作り方となっている。この点が山頭火の特徴である。山頭火の句は同じオノマトペを使用しても写生を提唱した子規の句の作り方とは明らかに違うのである。

次は山頭火自身の作品を比べることで，山頭火がオノマトペの効果をどのように使っているかを以下の５つの観点から考えてみたい。

１．老境・自己詠とオノマトペ

本来なら表１で調査した使用度数の多いオノマトペの句を比較するべきであろうが，ここでは，自由気ままな放浪生活という山頭火の境涯の特殊性に焦点を当てて自己詠を比較することでオノマトペの使い方の特徴を考察したい。

老いを感じさせられる時はどのような時であろうか。足腰が弱くなった時もそうであろうが，その一つに歯が弱くなった時もあげられる。放浪という点で並んで取りあげられる小林一茶も歯が抜けてがっくりと老いを感じたという句を作っている。山頭火にもオノマトペを配して歯を詠んだ句があり，次のようになっている。

（１）ほろりとぬけた歯ではある		草木塔
（２）ほろりと落ちた歯であるか	昭７年２月13日	書簡（以下年月日は「,」で示す）
（３）ほろりとぬけた歯ではある	昭７年４月号	層雲
（４）ほつくりぬけた歯で年とつた	昭７，７，２	日記
（５）ほつかりとぬけた歯で年とつた	昭７，７，５	書簡
（６）ほつくりぬけた歯を投げる夕闇	昭７，７，６	日記
（７）花見べんたうほろっと歯がぬけた	昭10，４，７	日記
（８）ほろりと最後の歯もぬけてうららか	昭14，４，18	日記
（９）ぽろり歯がぬけてくれて大阪の月あかり	昭14，５，１	日記
（10）ぬけさうな歯がぬけてほっと信濃の月	昭14，５，４	日記

（１）の句は一代句集『草木塔』に収められた作品である。一代句集『草木塔』の脱稿は昭和15年２月（同年４月発行）であるから，初作が昭７年２月13日で，これを改作して俳誌「層雲」（荻原井泉水主宰）に発表，以後，推敲・改作され，最終的に「層雲」に発表した「ほろりとぬけた歯ではある」を決定句として『草木塔』に収録したことが分かる。使われたオノマトペを取り出すと，ほろりと→ほっくり→ほっかり→ほっくり→ほろっと→ほろりと→ぽろり→ほっとの順に推敲を繰り返している。

「ほろり」は，ものがもろく散り落ちるさま，粒がやや大きい物が一度（一つ）こぼれ落ちる

ようすを表す。「ほろっ」も同じだが，粒は小さく軽やかなもの。「ほっくり」は，やわらかく，みずみずしくふくらんでいるさま，性質のおだやかで円満なさま，「ほっこり」とも言う。また，ものが折れるさまをいう。いずれも歯の抜け方を表している。「ほっかり」は，事態が急に変わるさま，これも歯の抜け方を表している。痛みもなく自然に抜けてしまったと表現することで「年とった」ことが感覚的に伝わってくる。「最後の歯」が抜けたときに詠んだ句では再び「ほろり」を使っているが，この句で注目したいのは句末が「うららか」と悟りのような感じを受ける自己の心象へ流れている点である。この句以後その傾向が強くなっていく。次の改作である「ぽろり歯がぬけてくれて」の句の「ぽろり」は，「ほろり」の「ほ」が半濁音になっている。意味は，「ほろり」と同じで涙や軽い粒状の物が，一度（一つ）こぼれ落ちるようすを表すが，清音より運動の状態が弾力的ではずんだ感じを与えるオノマトペである。「ぽろり歯がぬけてくれて」と言いさして「大阪の月あかり」で結ばれ，焦点が天然の景に移っており，苦痛から抜け出した安堵を思わせるようになっている。この安堵感が次の「ぬけそうな」の句を生み出したと考えられる。この句に使われたオノマトペは「ほっと」。「ほっと」は，安心したり，緊張などから解き放されて太く息をつくさま。これは，今までの句とは違って歯の抜け方ではなく歯が抜けた後の山頭火の気持ちを表している。これらの改作の中に「ぼろり」のような濁音は選択されていない。「ぼろり」は，重たげに何かを取り落としたり，何かの一部が欠けるさまを表し，ものが重くて大きい感じがするわけで，歯の形容にふさわしくない。小さい，軽い，もろいというイメージの言葉を探っていたことが，改作にはめ込まれたオノマトペから分かる。

短律から段々と長律になっていったことも含めてさまざまな改作の結果，最も短い形を決定句にした点が興味深い。最も単純化された句形に粒の大きさをイメージさせる「ほろり」のオノマトペが「歯ではある」と照応して大きな効果をもたらしている。

山頭火が自分自身を詠んだ句で，「ほろり」と同類語のオノマトペを用いた句に

（11）ほろほろほろびてゆくわたくしの秋　　昭14，11，7　　日記

がある。

行乞をして歩きつめることで悟ろうという念願を抱いていた山頭火であったが，老いとともに心身も疲れ切っているところに，地下足袋が破れて左の足を痛めたことを「四国遍路日記」に記している（昭和14年11月７日）。「私はすつかり行乞の自信をなくしてしまつた，行乞はつらいかな，やるせないかな」（同年11月５日）という記述もあり，その思いが伝わるのが（11）の句である。「ほろほろ」は，「ぽろぽろ」の同類語で，粒状のものやかたまりが連続してこぼれ落ちるようすを表す。句末に「秋」と措辞しているが，山頭火の内面である滅びの感の比喩である。これを「ぽろぽろ」「ぼろぼろ」で表すとイメージはどう変わるであろうか。前者だと乾いたものがこぼれる感じ，後者だと粒や塊の大きさが大きく強くなってしまう。これに対し「ほろほろ」だと，清音の響きによって，小さくて軽やかなものがこぼれるように落ちる静かさがイメージされる。「つらいかな，やるせないかな」という心持ちを「ほろびてゆくわたし」と表現し，それを「ほろほろ」というオノマトペで感覚的に言い表して成功している。

この滅びの感は，「ひしひし」という感覚的，精神的な何かが迫ってくるように強く感じるようすを表すオノマトペに死と好きな水を配して，

（12）死をひしひしと水のうまさかな　　昭14，10，25（23）　日記

のように，水のうまさを味わいつつも死を強く感じる自己を詠むことでも表現されていた。

この句が作られた昭和14年は，山頭火57歳，没する１年前である。同じ水を素材にした句でも，昭和３年，山頭火が46歳の頃の次の句と比べると趣が異なる。

（13）へうへうとして水を味ふ　　昭２，３年　　草木塔（昭３，11月　層雲）

「へうへう」は漢字にすると「飄飄」。意味は次の二つで，

①風が吹く音。また，そのさま。

②世事にとらわれないさま。世間離れがしてつかまえどころのないさま。自由で世間のしきたりや形式にとらわれず，はたから見るととらえどころのないようす。

である。この句では②であろう[8]。行乞の歩みの中でやっと出会った水を飲む。渇きをただ癒すのではなく感謝の気持ちを持って味わって飲む。その水のなんと美味しいことよ。このような句意になろう。水を飲んでいる自分の姿を世事にとらわれないさまを表す「へうへう」というオノマトペをかぶせて強調している。この時の山頭火，つまり，水を「へうへう」と味わっている山頭火に先述のような切迫感はない，明るささえ感じる。歯が抜けて年をとったと感じたのが昭和７年で50歳，最後の歯も抜けるのが「死をひしひしと」の句を作った昭和14年57歳である。だから，46歳と年が若く，意欲を持っていたからと言えばそうであろうが，「へうへう」というオノマトペの音の響きとイメージがそれをもたらすのだと言える。

山頭火には「自嘲」という前書を付して揺れ動く自己を詠んだ句もある。その中でオノマトペが使われている句は，

（14）影もぼそぼそ夜ふけのわたしが食べてゐる　　昭11　　草木塔（自嘲）

（15）旅も春めくもぞもぞ虱がゐるやうな　　昭13，３，17　　日記（自嘲）

で，自分の姿を客観視して，自らの姿にさびしい笑いを投げかけた作品である。

「ぼそぼそ」は，食物の水分やうまみが少なく，まずくなったようす。とぎれがちに小声で話すさまにも言う。この句は，水気がなくなった飯粒を食べているさまを「ぼそぼそ」で表している。影も「ぼそぼそ」食べているが，実は私が「ぼそぼそ」食べている姿なのだと，夜ふけにひとり食事をしているみじめな生き方を自嘲する。「も」と「が」の使い方も上手いが，「ぼそぼそ」の置き所も効果的である。

次の「もぞもぞ」は，「もそもそ」の濁音型。「もそもそ」はうごめくように動きまわったり，落ち着きのない感じで身体をしきりに動かしたりするようすを表す。「もぞもぞ」も同じ意味だが，「もぞもぞ」の方が動く物の動き方も大きく，音まで立てている感じを表す。虱の大きさは決まっている。山頭火の所にだけひときわ大きな虱がわいたわけではないだろう。大きいはずがない虱を「もぞもぞ」で表現せざるを得ない，虱にさえ見くびられたみじめな自分への嘲りである。この折の自嘲を表現するにはやはり誇張した「もぞもぞ」のほうがより効果がある。

以上15作品を取り上げてみたが，この他にも山頭火がオノマトペを使用して自己を詠んだ作品がある。それらを通してみても，折々の境地（内面の揺れ）を気息に合わせて，オノマトペを活かしつつ，表出している点で同様であった。

２．オノマトペ使用による動詞の省略

（１）すくすく煙突みんな煙を吐いて　　昭13，３，31　　日記

（２）すくすく伸びてはからまつ若葉　　昭14，５，５　　日記

（3）すくすくと筍のひたすら伸びる　　昭9，7，3　　日記

「すくすく」は，①何も遮る物がなく元気に育つさま，②樹木などが高くまっすぐにのびているさま，③ひたむきに進むさま，を表すオノマトペ。（2）（3）は「伸びる」という動詞を伴って①や②のイメージを伝えているが，（1）は動詞が省略されている。文にするならば，すくすく（立っている）煙突がみんな煙を吐いて（いるよ。）となろう。しかし，これでは何本かある煙突が鮮明に伝わってこない。それをイメージとして伝えているのが「すくすく」という言葉である。このことからオノマトペは動詞を自分の中に取り込んでしまう言葉だと言えよう。山頭火はこれを効果的に使用して凝縮した作品を作り出しているのである。

3．慣用的な使い方を脱したオノマトペの使い方

（1）松の雫しくしくと月草暮れず　　大4，4月　　層雲
（2）しくしくと子が泣けば落つる葉のあり　　大6，5月　　層雲
（3）旅の子供は夕べしくしく泣いてゐる　　昭5，10，10　　日記
（4）腹底のしくしくいたむ大声で歩く　　昭7，4，8　　日記
（5）霧雨しくしく濡れるもよろしく　　昭11，5，25　　日記
（6）石にしくしくしみとほる秋の夜の雨なり　　昭14，9，7　　日記
（7）しくしく腹のいたみに堪へて風の夜どほし　　昭15　　句帖

「しくしく」は，①鼻をかすかに鳴らして，静かに泣き続けるようす，②するどい痛みが続くようす，をあらわすオノマトペ。（2）（3）の「しくしく」は①の意味で使われ，（4）（7）の「しくしく」は②の意味で使われているが，残りの（1）（5）（6）の「しくしく」はどうであろうか。（1）はしくしくと泣くように落ちる雫のようすを表している。或は，「しくしくと」が月を形容しているとも取れる。しかし，通常の意味やイメージに近い比喩である。ところが，同じ比喩でも（5）は細かい雨に身体が濡れる状態を「しくしく」と見立てて（比喩して）いる。静かに泣き続ける状態が，霧雨が持つ雨粒の細かさと静かな降り方に転化された作り方になっている。その点で慣用的な表現から脱していると言える。（6）は雨が石に染みとおっていく様子を「しくしく」で譬えている。染みとおりにくい「石」を配したことで，読み手に意外性を印象付ける。「しくしく」が持つ時間の継続のイメージを効果的に使っている。

これらは，それぞれ通常のイメージをずらして（転化させて）新しい，独自の世界を作り上げた作品だと言えよう。

4．音の響きとリズム

（1）ひつかけようとする魚のすいすい澄んで　　昭7，6，14　　日記
（2）杉山しんしんしよんべんしよう　　昭14，5，1　　日記

「すいすい」は，①滞らず軽快に連続して進む様子，②物事を滞らせず，順調に片付けていくようす，をあらわすオノマトペ。この句の場合は①。「魚のすいすい」とあれば通常は「泳ぐ」と続くはずであるが，この句は「澄んで」となっている。こう措辞されたことで，オノマトペを境に意味の流れに屈折が生じている。しかも，「すいすい澄んで」は「すいすい」「す」となっており，二泊の畳語（反復）の第一音，続く動詞の第一音で韻を踏んでいる。ここに相乗効果を見出すことができる。リズムが出て，調子がよく，聴覚に心地よさが残る。（2）も同様である。

「しんしん」は，奥深く静寂なさま，ひっそりと静まり返っているさま，樹木の高く深く生い

茂ったさま，また，樹木のように高く並びそびえているさま，をあらわすオノマトペ。高く聳える杉の山は静まりかえっている，折から，もよおしてきて小便をしよう，の句意。意外な言葉の取り合わせでユーモアを感じる。

オノマトペから連想する言葉の範囲を超えた言葉を置いて新しい世界を作り出すことに成功した作品である。このような手法も瞬間的にイメージを伝えるオノマトペだからこそできるのであろう。

５．一句の中に複数のオノマトペを使った効果

一句の中にオノマトペを効果的に使うことができるのであれば，それを複数回使用すると効果が増すかという問題がある。そこで，複数のオノマトペを使った効果について考えてみたい。複数のオノマトペを使用した俳句は，

（１）からりと晴れた朝の草鞋もしつくり　昭５，10，29　日記
（２）ほっとさいたかひょろひょろコスモス　昭７，９，16　日記
（３）ぎゃあとなけばほうとなくふくらうの夜で　昭８年９月22日～10月31日　日記
（４）よぼよぼの眼がぢっと見上げてゐるのが熟柿　昭８年11～12月　日記
（５）若竹ゆらゆらてふてふひらひら　昭９，７，６　日記
（６）月夜の柿がばたりぽとり　昭９，９，23　日記
（７）しとしとしぐれる笹のさらさら　昭９，12，27　日記
（８）ぽろぽろ冷飯ぽろぽろ秋寒　昭15，９，17　日記

である。

まず，擬音語の（３）と（６）であるが，音の響きを効果的に使って通常の使い方をしている。残りの（１）（２）（４）（５）（７）（８）は擬態語と擬態語の組み合わせ。（１）は，からりと晴れた朝に草鞋を履けばそれもしつくりと足に馴染んで，歩く喜びが伝わってくる。（２）は，ほっとさいたかと呼び掛けることでひょろひょろコスモスに対する愛情，もう少しひろげて言えば弱いものへの愛情を感じ取ることができる。（４）は，「見上げて」といえば眼であるから普通作句の時に連想できる言葉は省かれるので，「眼」は省略対象の言葉である。しかしこの句では「眼」が「よぼよぼ」と形容され省くことはできない。「よぼよぼの眼」から見上げている人が想像できるからである。それに「ぢっと」が加わると時間の長さが加わることになり，その人の気持ちまでが推測できる。（５）では，オノマトペによって，若竹はゆらゆら，蝶々はひらひら，とそれぞれの大きさ，動きの違いが一瞬にして伝わってくる。（７）も同様で，オノマトペによって時雨と笹の質の違いが瞬時に伝わってくる。しかも（７）の特徴は，説明の言葉がすべて省かれている点である。オノマトペと形容対象のみの組み合わせで，最も単純化された表現である。オノマトペの働きを最大限に活かしたと言えよう。（８）は「ぽろぽろ」が二度用いられている句である。「銃後風景として」の前書があって『山頭火全句集』に記されている。同一語なので調査の一覧では一語扱いとして数えた。冷えた御飯を食べている。冷えきって水分もなくなりぽろぽろの飯粒。それをぽろぽろこぼしながら食べているのである。オノマトペである「ぽろぽろ」の繰り返しがわびしさを表し，増幅させている。更に，「秋寒」が句末に配されたことでわびしさが強調された。この句に似た句が「一草庵日記」にあり，そこでは「ぽろぽろ冷飯ぽろぽろ秋寒」となっている。ぽろぽろは山頭火自身のことで，それが省略されている。ぽろぽろこぼれる冷飯とぽろぽろになった肉体と生活，折からの秋の寒さが身にしみてくるよ，というのである。

類似のオノマトペが一句の中で動かない。選ばれた言葉であることが分かる。

複数のオノマトペの使い方は，一句に一つのオノマトペを使用した場合と同様で，オノマトペを使用するときに慣用的な範囲内での使い方もあれば，慣用的な範囲を脱した独自な使い方もあった。後者においては動かない言葉，つまり，意識的に選ばれた言葉であることを指摘できる。

Ⅴ　結　　び

今回の調査で抽出したオノマトペを含んだ作品は304句で，この数は山頭火が生涯をかけて作句した数に比べるとわずかな数である。しかし，これらの作品からは改作・推敲を繰り返してより良い表現を求めた山頭火の句作態度を見出すことができた。しかも，作品は，放浪の折々の内面を，時に悟りに近いものとして，或は，時に生身の苦悩に満ちたものとして，オノマトペを生かして表出したものであった。山頭火作品のオノマトペ使用の特徴を通して，オノマトペが持つ特性を以下のようにまとめることができる。

・オノマトペの使用によりその音のイメージをもとに印象が鮮やかになり，その雰囲気・状態（内容）を感覚的に表現するのに有効である。
・オノマトペの使用によりその音に含まれている響きを媒介としてリズムが生まれ，実感（状態）を瞬間的に伝えるのに有効である。
・オノマトペを使用して動詞を省略し，凝縮した内容が生まれた。オノマトペは表現の省略を可能にする。
・オノマトペを慣用的な意味からずらして（転化させて）使用することで，平凡を脱し，新しい世界を作り出すことができる。
・慣用的な表現のずらしに似ているが，今まで試されなかったオノマトペを措辞することで，意外性が生まれ，新しい世界を作り出すことができる。

今後は，今回の調査で不十分であった点を補って，オノマトペの語形のバリエーションについての分析を詳しくしてみたいと考える。

註

⑴『山頭火全句集』（春陽堂書店　平14年12月刊）
⑵『正しい意味と用法がすぐわかる擬音語・擬態語使い方辞典』（創拓社　1993年５月刊）
⑶『擬音語・擬態語辞典』（角川書店　昭60年４月刊）
⑷『擬音語・擬態語4500　日本語オノマトペ辞典』（小学館　2007年10月刊）
⑸『短歌の技法　オノマトペ』（飯塚書店　1999年５月刊）
⑹（　）の中は句数を示す。
⑺『擬音語・擬態語4500　日本語オノマトペ辞典』（小学館　2007年10月刊）
⑻「へうへう」について，荻原井泉水は「身はへうへうとして風の如く行く」（「歩くもの」『俳談』昭10・７　千倉書房）と鑑賞。村上護は「ぶらぶらと当てどなくさまよう意もあろうが，世俗とかけ離れて物事にこだわらない様と解しておきたい。」（『山頭火　名句集鑑賞』平19・５春陽堂書店）と述べる。

参　考　文　献

種田山頭火『山頭火全句集』（春陽堂書店　平14年12月刊）
阿刀田稔子・星野和子『正しい意味と用法がすぐわかる擬音語・擬態語使い方辞典』（創拓社　1993年５月刊）
浅野鶴子編『擬音語・擬態語辞典』（角川書店　昭60年４月刊）
小野正弘編『擬音語・擬態語4500　日本語オノマトペ辞典』（小学館　2007年10月刊）
飯塚書店編集部編『短歌の技法　オノマトペ』（飯塚書店　1999年５月刊）
村上護『山頭火　名句集鑑賞』（春陽堂書店　平19年５月刊）
松井利彦『種田山頭火』（桜楓社　昭55年３月刊）
小嶋孝三郎『現代文学とオノマトペ』（桜楓社　昭55年３月刊）
『新潮日本文学アルバム40　種田山頭火』（新潮社　1993年６月刊）
『えひめ発百年の俳句―郷土俳人シリーズ⑥種田山頭火　人と作品』（愛媛新聞社　1998年６月刊）
『山頭火全集』全11巻（春陽堂書店　昭61年５月～昭63年４月刊）